

# 日本大学吹奏楽研究会 O B 会 報

— 創刊号 —

## O B 会について思う

佐藤力男

O B 会という言葉は誰れが作ったか知らないが、簡単な略語で妙を得ていると思う。大学を基準とした(それぞれの会、組織によって異なるが)O L D、B O Y の異だから、至極、ごもっとも立話であるが、直訳すれば、「年寄り少年」ということであって、年寄りではない、少年なのである。

ここに、この言葉の妙があり、O G (O L D G I R L) のニューアンスにない、青春の微笑えまじさが漂う。O G の言葉には、O L D M I S S という女性に不著名な言葉と共通するものがある。言葉自体のユーモアがあるものも無いものではない、こんなに略語でも感覚的に違うのである。

学生時代、共に日本大学吹奏楽研究会という場で過したことが、このO B 会に参加する資格なのであるが、とかく、このO B 会の本趣から離れてO L D になる危険性がある。そのO L D になる危険性は、若さを忘れ、又、自己の意図から老化現象を身につけることなのである。これは卒業後の仕事の分野にもよるであろうが、貫録という言葉で、現役に、現役に対し、もったいぶったり、現役のとき持っていた立派な人格をも放棄する人があるこれはO B 会の会員として失格であり、メンバーとしての意識喪失である。

O B 会は常に共通の基盤である日本大学吹奏楽部員ということをお忘れなさい。常に学生時代に持っていた若さ、そして組織の中で立派に自分の個性を発揮していたピッコロ、スザーフォンに徹して貰いたいのである。

よく現役と会ったO B 諸君から「現役は変わった、小粒だし、ファイトが無い」又、現役からは、「現実ばなれた話だと思えます」と聞く、これは、お互の会話を通じ、懇親を通じていても一方通行であることを証明している。

例え、会話の時間が少くとも、吹奏楽の基盤から、お互いに相手の首を聞いて調和し、立派な音楽演奏を行うとするなら、当然、相手の真意を聞き、又、相手に真意を伝える努力がなされなければならないのである。

今年の新年会でも、新しいO B が古いO B から酒を媒介として立派なマナーで意見を聞き、又、自己主張していた、吹奏楽を地で行っている姿である。

O B 会も自己の努力がなかったら、その会から価値を得ることは少ない、又

魅力も感じないと思う、O B 会で新しいO B、又は現役から現在の若さ、思考方法などを汲み取れる人はやがて育ちくる自分の子供との対話で立派な指導力を発揮するものと思うし、又、現役が、古いO B などから、生きた歴史を汲み取ることができると思えば、身近な発展理論を自己の実践する場、吹奏楽研究会活動に還元できることになる。

二十周年も近づいている、O B 会のステージも近い、このステージ構成に今から夢がわいてくる。

O L D B O Y らしい演奏は想像したのみで、笑いあり、涙ありである。

ジュニアのステージなども考えられることである。

## 歴史 — ある日地震が起きた —

37年度 土岐悦康

五月十六日「十勝沖地震」は突如として起った。新聞、ラジオ、テレビ等は現地実情を出来得る限り報道した。それは鉄道の遮断、道路網の各所遮断、電信電話不通の中で、報道関係者の懸命の努力、使命感によってより詳細を極めることに責務を全うさせられた。遠隔地において微動だに感受しなかった人々も、弱震程度で驚いた地方の人々も、刻々とあがって来る被害の実情に目をみはり、耳をそばだて、徐々に興奮の渦にのまれて行った。

「皆にカンパを呼びかけよう」Kは耐えきれぬ面持ではき出すようにいったそれは自分の気持をもう一度確認する言葉だった。幸いその朝はこれといって仕事もなかったが、そんな事はどうでもよかった。職場に携帯された各新聞の中から、現地の痛ましい写真と記事、被害状況の一覧表をもどかしげに切り抜き、ランヤ紙に貼り付けた。「被災地の子供たちに下着、靴下などを送りたい」旨を記して、よびかけは出来上った。

この間、労働組合の一幹部から中傷が入った。「本部から義捐金カンパの指今が来る筈だから、分派活動はするな」、「指令が来たら合流しましょう」けれども本部の指令は「被災地救援を組織内に限る」として職場に流されて来たのだった。職場では組合のカンパだからと些少の金をカンパに回す姿があったが、中には「組織内」に限定するなど抵抗を感じるといって拒否する者も居た「それなら僕らよびかけの方にお願い下さい」「うん良いよ」よびかけてから一週間で締めると一、五〇六円あった。しかしKにとって何となく割り切れなものは一円玉や五円玉に混って、新しい千円札一枚丁寧に折られて入っていたことである。僅かな給料、小遣いの中から何人かの心によって入れられた五〇六円と一枚の千円札。何故かKには千円札の薄さを感じながら郵便局へと歩いた。

一週間のよびかけで一、五〇六円。既に組合としてのカンパも回ったことではあるし——ということで同僚と相談の結果縮切り、東京の商店は既に夏物商品に切り換えられているので、そのまま現金を送ることにした。郵便局では、NHKのたすけ合い運動なら無料ですよという。「五戸の町役場宛に送りたいんですけど」——八戸市の中心部は被害も大きいとはいえないながら、救援の手も回り、復旧も急速に進められているということだが、いわゆる郊外は田畑の被害が致命的、まして救援の手も遅れがちのことでは非ともそういう所に物心の励ましを送りたいという気持であった。「それなら現金書留にしないとだめですね——細かい金を五番でお札と両替してもらった方が良いでしょう」親切にいつてくれた窓口と変って五番の窓口では「両替はやっていないのだが……」と渋い顔をした。他の事ではないし何か……と頼み込んで五百円を札に替えてもらおうと五戸町役場御中としたためて投函、心もさわやかに……という訳には行かぬ割り切れぬ気持が、又被害地を思っ、更に暗く重くなって行くのだった。

政府は現地視察もそこそこに、ただ「見て来た」だけの冷たい態度で「激しい災害」適用についてもめ、改正をするのしないのとか、地震探地の方法について今更のように云々している——と新聞等の報道で明らかにされ、いつものことながら「泥縄式」の行政にKはいきどおりを感じた。こういう不慮の災害に対してこそ、自分たちの税金が有効に使われねばならぬのではないか。始終墜落するジェット機を高い金を出して買い込み、庶民のわずかな嗜好である酒・煙草を一方的に値上げし、健康保険も個人負担を値上げして、そうしてほんとうに困っている人にさしむけるべき手を控えるとは……あれこれ考えて夜明けまで寝つかれぬこともあった。

新聞等も既に他の記事で紙面は埋められ没交渉となった他地域ではもはやそのことは一つの物語でしかなくなってしまうようである。願うことではないが、今度またこのような惨事が起るまで思い出されぬことになったのであるか。現代の歴史とはこのようなものなのか。



# 礼儀

鈴木康友

ぼくの勤務先へ現役の諸君が時々顔をみせに来てくれる。彼等の折目正しい態度をみて、上役や同輩達が云う。「いまどきの若者にしては珍らしい、礼儀をわきまえている。」など——評判がすこぶる良い。

だが、OB諸君は社会人としての礼儀正しき、応待の態度等、ほめられる人が何人いるだろう。目上の人に接する場合はまあまあとして現役、後輩に対する礼儀がなっていないOBも散見される。

定期演奏会、納会など公式の催しに招待されたOB達が汚れた仕事着、サンダル履き、ノーネクタイ、と三拍手そろった服装で姿をみせるに至っては、礼儀も何もあつたものではない。

先生や父兄の方々のそばで粗野な言動——父兄の方々は、どう思うだろう!! OB諸君!! あなた達が日大ブラス発展の足を引張っているのです!!

（OB会長、東京都児童会館勤務）

## 流れ者V 五年生となる

三十八年度卒業 佐藤 宏

ラッパの音に送られてから、早五年目を迎えた。月日のたつのは早いものである。

青山にある本社土木部に配属になってから、二年目より我々職場の第一線ある工事現場へ転勤を命じられた。そして、若さと情熱と夢を抱いて、北国柏崎の隧道工事の現場へ転勤した、そもそも流れ者!! 渡り鳥の始めである。

建設業は一般の仕事と違い、色々な面で特殊性があり、特に土木関係は転勤も多く、東京から新潟、新潟から長野と一般サラリーマンでは考えられない移動が多々あり、家庭と仕事の両立に苦労している人もいるようである。しかし独身時代は東京を離れて地方に出るのも又勉強となる、私も柏崎の二年間の生活が何よりも有意義であつたし、仕事、精神、そして色等、自分なりにすべて磨いて来たつもりである。

東京で満員電車で揺られ、排気ガスの中でコセコセ働くより、地方の澄んだ空気の中で伸び伸び仕事するのも健康的で良いし、各地を詳しく知るのも又楽しいものである。

柏崎はその昔、越後線の西山附近で石油が採れた頃はそれは賑やかであつたらしい、今でも昔の遊郭の跡があり、料理屋、旅館等に変つていて、そして芸者の数も町の大きさを比較して多く百人を数えると聞くが、東京の芸者と違い、人情があり年も若く色白で、芸が達者であつた。このような事を若い社員が社用で知る事が出来るのも建設業の特殊性かもしれない。

さて、柏崎の隧道工事（その一）を終え、越後湯沢と長野県大町のダム工事の現場へ三ヶ月行き、真夏の黒部、北アルプスの涼味を満喫し、再び柏崎で六ヶ月勤務の後、船橋の総武線、そして翌年の十月に東京の常磐線の高架橋工事へと渡り歩いて来たが、交通ラッシュの東京、人、人、人の東京、庭のない家がぎっしりつまつた東京——での土木工事は工事そのものより、周囲の苦情処理、一般への安全対策、騒音等による公害防止等に気を使い過ぎ、仕事の能率

が悪く仕事に味がないのが残念である。山の中で周囲に気兼ねなくダイナマイトをかける様な気持で、仕事が出来たらと思うが無理な話である。これからは転勤するであろうし、又、仕事と共に流れ歩くものと思う。流れ者五年生!! まだまだ渡り鳥の様に歩まねばならない五年も十年も!! 終りに日大ブラスの発展を心から祈つて筆をおきたい。

## OB会をもつと考えて下さい

OB会は、何んにもしていないのに、会費ばかりを取るといふ声を、会員から時々聞きます。そのOBに、「それでは、アナタは、何かしましたか?」ときけば必ず「何んにもしていないし、何をしても良いか判らない」といふのが多いのは、どうしてでしょうか? 現役の四年だった時は、自分から一生懸命、仕事をしてきたのに、卒業したら急に他人に依りかかってしまふというの、どうした訳でしょう。それともOB会は年寄りOBの集りだから、俺達には、関係ないとも考えているのですか? それとも幹事がいるのだから幹事にやらせておけば良いと思つていふのですか? 俺は、仕事が忙しいからヒマなのがOB会を、やれば良いと思つていふのですか? OB会は、特定の人の為の物ではなく、OB会員全部のものなのです。故ケネディ米大統領の言葉を借りるまでもなく、OB会が会員の為にならなければ、呉れるのを期待するのではなくて、会員が「OB会」に何をすることが出来るかを考えて下さい。

OB会という名に値する会員数になってからまだ三、四年にしかならないのですから、一人でも多くの意見が必要なのです。OB会が全会員の満足のいくような、立派な組織にする為にも、皆さんがOB会の事を、もう少し時間をさいて考えて下さい。

今の内に立派な組織を作っておくことが、これからOBになる若い人達に対する現在OBの責任だと思つて、魅力あるOB会にある為に活潑な意見の交換を、期待します。

やっと一号を出せた、小さな会報ですが、どうぞこの紙面を使って、意見の交換をして下さい。何時でも臨時増刊を出す用意をしておきます。 森宮

# 広報

昭和四十三年度新入生歓迎会が六月二日、五日市の秋川渓谷で行なわれました。当日、OBの参加者は九名でした。

OBの参加者は、鳥井君、鈴木君、森君、渡辺君、丸山君、土岐君、森宮君、竹藤君、小野君、下田君の九名。その他中大——の間宮氏、農大ブラス、でした。当日行なわれたバレーボール大会では、OBチームは善戦して準優勝でビールを手に入れ、今年、OBの参加が少なかったため、淋しいと云われました。来年からは、多数の参加を望みます。

# OB短信

◎ 崎山君は、社会福祉施設の視察の為八月十日から十月二日までソ連、東ヨーロッパ、北欧へ出かけます。次号には、体験談を掲載致します。御期待下さい。

◎ 日本海外技術青年協力隊の一員として比国でダムを建設していた。長倉君が二年振りに帰国されました。次号に「ドン、フィリピンに行く」を掲載致します。尚、現在、東洋綿花に勤務。

◎ 滝田君、入院。

滝田君は、五反田にある、関東通信病院に三月から入院されました。九月には退院の予定。一日も早く回復されんことを祈ります。

## 結婚

中山久仁彦君 一月十七日 弘済会館

佐藤貴君 三月 二日 プリンズホテル

長倉 孝君 三月十五日 湯島会館

佐藤 式 壮君 東京駅ステーションホテル

佐藤 宏君 十一月十七日 東京駅ステーションホテル（予定）

◎ 会員の消息を、御存じの方は、お知らせ下さい。

# 行事

定期演奏会以後の研究会の行事は左記の通りです

七月 夏季演奏旅行の為の合宿。場所未定

八月 北海道演奏旅行 四国演奏旅行 コンクールの為の合宿

九月 コンクール（二十二日）

十月 ワンワンカーニバル ミュージカル 大学祭

十一月 大学祭 明治神宮奉納演奏会 コンクール全国大会（二十二日、二十三日）。シルバパレード 大吹連演奏会

十二月 納会 幹部交代

◎ 長い間の懸案であつた、OB会報が現役の機関紙に遅れること約七年にして第一号が発行出来ました。短い期間しかないので、第一号の原稿を書いて下さった、諸兄にお礼申し上げます。

◎ 当会報の為に沢山、原稿を送って下さい。次号は、年末に発行の予定です。

◎ 不慣れた担当者に、沢山のアドバイスを下さる、原稿の遅れを、ものともせず、本日の発行を助けて下さった、森山一誠堂の森山君に、深く感謝致します

◎ 尚、当会報に寄稿して下さい方は、左記へ、御送り下さい。

東京都文京区本郷二の十五の十七

東京都大田区雪ヶ谷町三〇〇

東京都港区芝高輪町五六

前田 敏晴

森宮 延佑

小野 博美

日本大学吹奏楽研究会OB会報（創刊号）

昭和四十三年七月六日発行

発行所 日本大学吹奏楽研究会 会

発行責任者 前田 敏晴

印刷所 東京都文京区本郷二の十五の十七

一誠堂 森山印刷所

電話 四一四四（代）